

## 会長挨拶

神谷和也

数理経済学会の前身となる研究集会が京都大学数理解析研究所において開催されたのは、20年以上前と記憶しています。これ以後、平成9年より「数理経済学研究センター」として学会が発足し、定例研究会、研究集会、国際会議などの開催、機関誌および研究叢書の刊行等を行ってきました。これらの活発な活動は、前年度会長である丸山徹先生および楠岡成雄先生をはじめとする発足当時からメンバーのご尽力の賜物であると考えています。

活発な活動の一方で、この20年間には多くの懸案があったと理解しています。最近の懸案事項としては、財政基盤の問題や日本学術会議への登録などがありました。しかし、これらは前年度までの会長および評議委員の先生方のご努力で解決し、現在は重要な問題はないと理解しています。したがって、現在は、新たな展開を考えることができる状況にあると思います。私はすでに50代半ばを過ぎ、意見を差し控えるべき年齢に達しています。これからの展開は、できるだけ30代および40代の若い研究者のご意見を取り入れて考えていくべきかと思います。私の役割は、若い研究者を援助することにあると考えています。

経済学もこの20年の間に変化を遂げています。たとえば、数理経済学者に限らず純粋理論家は少なくなりつつあるように思います。しかし、その一方で、経済学において数学はますます利用されるようになってきていると感じています。例えば、計量経済学の手法は高度化し、また構造推定を利用した実証分析が盛んにおこなわれるようになり数値計算テクニック等が重要になっています。私は、数学分野の展開には疎いのですが、会員の先生方にご教示いただければと考えております。

さて、私が研究対象としての数学及び数理経済学に関心を持つようになったのは、学部生時代に遡ります。当時、私の母校である京都大学ではマイクロ経済学、マクロ経済学等の基礎的な科目の講義はありませんでした。一方、単位取得は極めて簡単で、同学年には試験期間以外は京都には来ないという強者もいました。そのような状況の中、気の向くままに勉強していた私が出会ったのが不動点計算法と微分位相幾何学です。工学部に移って応用数学を研究しようと考え、事務室に相談に行ったこともありましたが、経済学部から工学部への転学部は不可能だと言われました。この事務員が言ったことは誤りで転学部は可能であったという話も後に聞きましたが、真相は分かりません。これが、後の私の人生にとって良かったのか悪かったのかは判然としませんが、学部生時代に学んだ数学が、経済学の研究に大いに役立ったのは確かです。大阪大学とYale大学の大学院では、一般均衡理論、特に収穫逓増問題を研究しましたが、学部生時代に学んだ数学の手法を駆使しました。ある意味、学部生時代にスタンダードな経済学の教育を受けなかったことが、私の研究に役立っているのかもしれない。

現在、私が在籍している東京大学では、スタンダードな経済学を体系的に教育しています。教育水準は国際的にも高いレベルにあると思います。また、学生も平均レベルはともかくとして、トップレ

ベルは極めて優秀です。しかし、彼らの多くは教員と同じ研究分野に関心を持ち、多様性に欠けるという印象を持ちます。数理経済学会の会員の皆様の多くは、私のように教員の関心とは無関係なところから経済学や数学に興味をお持ちになっている場合も多いかと思います。今後、数理経済学が経済学や数学の本流になることはないと思いますが、多様性の中から興味深い研究が生まれる可能性は大いにあると考えています。